

特別対談

郷里・鳥取への思い

漫画家谷口ジローさんと竹内功市長が語る

『郷里ふるさとに帰る……のではない、

いつの日か郷里が
それぞれの心の中に帰って来るのだ。』

（「父の暦」のラストシーンより）



昨年、「バルセロナ国際コミックフェア」を始めとするスペインの三つの国際漫画祭で、鳥取市出身の漫画家谷口ジローさんの作品『父の暦』（鳥取市が舞台）が受賞されました。さらに、今年二月、三十回目を迎えたフランスの「アングレーム国際漫画フェスティバル」では、『遙かな町へ』（倉吉市が舞台）が「三賞ノミネート」「賞受賞」という、日本人初の快挙を遂げました。

その国際的に活躍している谷口ジローさんと、竹内功鳥取市長が、受賞作品への思いや、郷里・鳥取についてなど、語り合いました。

（対談は七月二十五日・東京新宿）

感動は世界共通

竹内市長 最初に、谷口さんの作品が、日本はもとより、海外でも高い評価を得て、スペイン、フランスで賞を受賞されていますが、どういうところが評価をされているのか、ご紹介いただけますか。

谷口さん 私は、もともとフランスの漫画に興味を持ち、影響を受けていました。無意識のうちにヨーロッパの絵の要素が入っていたのだと思います。最初、ヨーロッパの出版社が私に興味を持ったの

は、「歩くひと」という作品だったのです。その作品は、ほとんどセリフがなく、日本の風景と散歩する日常を描いた漫画だったからでしょうね。それをフランスで初めて出版したところ、ある程度の評価を得たんですよ。

